

ASUたちばな会報

第3号（平成30年10月発行）

| | | |
|--------------------------|------|----|
| 三河高校・三河中学校の思い出・・・・・・・・・・ | 三浦謙次 | 1 |
| 教員生活を終えて・・・・・・・・・・ | 渡辺孝夫 | 3 |
| 退職後の生活・・・・・・・・・・ | 杉浦三雄 | 4 |
| お遍路のおすすめ・・・・・・・・・・ | 間宮美和 | 7 |
| 蕪村「春月辞」について・・・・・・・・・・ | 関総一郎 | 9 |
| 2018年度 総会次第・・・・・・・・・・ | | 12 |
| 事務局より・・・・・・・・・・ | 成瀬正直 | 13 |

三河高校・三河中学校の思い出

三浦鎌次

(1) 三河高校での勤務はわずか2年

私は岡崎市立小、中学校や教育委員会等に37年間勤務し、定年退職した平成5年に三河高校の渉外担当・数学の教員として採用されました。先輩で三河高校創立時から勤務してみえた小林績先生のご推薦でした。退職前の10月頃、当時、三河高校の戸田校長先生とご一緒に私の勤務校を訪問され、強いお誘いをいただきました。当時の三河高校は1学年15学級の大規模校で、三河地区では最も新しく活気に溢れた校風で知られていました。渉外面は教育大附属校の勤務もあり、三河地区の先生方に知己も多く、心配はありませんでしたが、初めて高校生を指導することには不安がありました。小林先生の「仲間の先生が多数みえるから何とかなる」という無責任な一言に励まされ、応諾の即答をさせていただきました。

三河高校には渉外担当として小林先生をはじめ三河の各地の校長経験のある先輩6人、それに新参者の私を合わせて7人が二職（第二職員室）と呼ばれる部屋で一緒に仕事をしました。私は主に岡崎市と幸田町を担当し、中学校と学習塾訪問をし、連絡を密にするように心掛けました。

数学の授業は基礎・基本的な指導が必要な1年生で週16時間を担当しました。生徒は素直な子が多く、テスト前には二職の部屋に何人かが質問に訪れるなど、若さをもらって活気づいていました。

平成5年度末の生徒募集では、528名の推薦入学生を得ました。三浦の担当校から合計127名の推薦入学希望生徒が集まり、安堵しました。また来年度もがんばるぞと思っている時に思いがけないことが起こりました。ここに中学校を創るという計画です。設立準備係に名指しされ、後継者探しに奔走しました。幸い、大学同期で岡崎市小・中校長会長であった谷重夫先生が快諾してくれ、戸田学監先生にも喜んでいただけま

した。

(2) 三河中学校の設立担当に指名されて

平成5年度末は忙しい日々でした。中学校設立の最初の難問は「どんな中学校にするか」でした。当時は、「学歴社会だから子供にはぜひ大学まで進んで、立派な社会人になって欲しい」というのが社会の趨勢でした。地元岡崎市で、教育熱心な保護者に校長会やPTA連絡協議会等を通じて、内々に聞いた意見も殆どが同じでした。さらに岡崎高や岡崎北高への進学の手も開いて欲しいとの希望も多々ありました。戸田学監、日高校長、増田事務長、二職の小林先生とも何度か協議した結果、「理想は有名大学を目指す中学・高校一貫コースだが、当面は三河高校の進学コースに進むことを基本とする。希望があれば各地有名高校への進学も認める。」と決められました。

平成7年度開校を目指して、6年度は本格的な準備期間でした。国・県等の手続き、交渉は戸田学監、増田事務長が精力的に動かれました。私は高校の授業を免除され、生徒募集計画、学校案内パンフの作成、学校環境や教室環境の具体化、関係教育機関への連絡等の業務を担当しました。最初に近隣地区の大谷中・桜丘中・星城中に学校参観をさせてもらいました。高校の渉外担当の折に知り合った先生方の好意で、中学校の運営方針や難しい点も聞くことができました。また、その一方、生徒募集で競合するので大変だなと感じました。

最初の学校案内パンフが完成、早速配布を始めました。大きな都市は直接持参し入学への協力をお願いしました。岡崎市は教育長、校長会長の好意で、小学校長会の会合で説明・配布をさせてもらいました。他の地区は校長会や連絡箱で6年学級数分余を配布し、希望者があれば連絡して下さるようお願いしました。名古屋関係は戸田先生とご一緒し、私塾共同組合や河合塾等に協力をお願いしました。三河地区は「塾の会あいち」との懇親会・説明会を岡崎・豊橋で開催し、周知、協力をお願いしました。2学期から高校の藤井淳司先生に準備担当として加わっていただき、中学校の入学式・始業式、教科指導、生徒指導等の具体的な

年間計画作成に取り掛かることができました。また、公立中学校で実施している行事はなるべく取り入れ、心豊かで健康な中学生に育てたいと願っていました。

三河中学校は平成7年4月6日、入学式・始業式・入寮式が新入生22名を迎えて和やかに行われました。教師は藤井（教主・国）、岡本（英）、鈴木昭（数）、久保田（理）、鈴木直（社）、土井（音）、鷹巣（英・寮）、武藤・澤井（事）それに講師として太田（美）、新海（体）、広羽（家）、三村（技）、それらに加え三浦（頭・渉）の14名が一致団結、新鮮な気持ちで頑張りました。

あれから24年、残念ですが三河中学校は来年から休校です。淋しい限りです。三河中学で一緒していただいた皆様に深くお詫びし、お礼申し上げます。

教員生活を終えて

渡辺 孝夫

私は、小さいころから電気にとっても興味があり、小・中・高校時代には、ラジオ製作に夢中になっていました。その後、名城大学付属高校から名城大学理工学部電気工学科に進学しました。

しかし、電気が「好き」であることと電気が「できる」こととは、別問題でした。大変苦学して卒業しました。このとき、私の教育法の原点が生まれ、モットーは「何事も続けること」。そして、

- ① 私が受け持った生徒は、必ず全員卒業させる。
- ② 落ちこぼれを出さない。

私は、この2つを教師としてのわが信念と定め、退職するまでずっと教育実践を続けてまいりました。

学園の前理事長（故水野先生）が「プラス・ワン」という指針を出し、

生徒にさらにもう1つの資格を取得させようと、教師に「げき」を飛ばしました。先生たちも頑張っていました。私もプラス・ワン、決意して数学の教員免許を取得するため、大学Ⅱ部(夜間)に入学し、免許を取得しました。

今から10年程前、2年生の電子実習の科目があり、クラスを3班に分け、パソコン、ロボット製作、計測の授業で、私は計測を担当しました。内容は、半導体素子(トランジスタ・ダイオード・サイリスタ)の特性を調べ、レポートを作成するというものでした。その中で、発光ダイオード(青色、緑色、白色)にわずかに電圧を加えながら上げていき、ある点で強烈な光を発しました。このとき、生徒は非常に興味を示しました。

昨年(平成29年11月)、青色発光ダイオードの開発で、ノーベル物理学賞を受賞した天野浩氏の講演があり、その後、レセプションで先生にお会いして、発光ダイオードの実習の内容を説明したとき、先生は大変感心なされていました。名刺をいただき、私は元気をいただきました。私が教師時代にもっとも感動したことです。

終わりにあたり、ASUが益々ご発展されますことを心から祈念申し上げます。

退職後の生活

杉浦 三雄

昭和48年から11年間愛産大工業高校に奉職、機械科の教員として採用されたにも関わらず機械を教えたのは5年間、後の6年間は英語を教えました。このような我儘を許して頂きました当時の校長戸田先生には感謝しております。

その後愛産大三河高校に転勤し30年勤務、最後の4年間は三河高校と三河中学校両校のお世話になり貴重な経験をさせていただきました。

平成 25 年度末をもって 41 年間お世話になった学園を退職しました。その後 4 年数ヶ月間の私の生活をお伝えすることが、退職された皆様の何らかの参考になればと思います。

この間特に熱意を持って取り組んできたことは、テニスと読書です。4 年前のテニススクール参加が私のテニスのスタートでした。30 年位前に半年ほどの経験があっただけの私ですから、全くの初心者からのスタートと同じでした。65 歳から新たなスポーツを始めることがいかに難しいことか気付いたのは、スクール参加の初日です。「初心者歓迎」の宣伝文句を信じて行ったのですが、開始 5 分で初心者らしき人は自分一人だと気づきました。しかも最高齢でした。夜間に 90 分レッスンが週 2 回、全 10 回のレッスンでした。高齢の初心者が、若く経験の多い人たちと一緒にレッスンを受けることはとても厳しいものでした。

現在もその時のコーチのレッスンに週 2 回参加しながら、テニス仲間達とも楽しんでいきます。経験豊富な人たちの中ですから、情けない負け方をすることが多いのですが、それでも、スポーツが心身ともに爽快にさせてくれる快感を味わっています。間もなく 70 歳となりますが、同年のテニス仲間から「もう年だからやめようか」などと弱気な声は全く聞きません。私も彼らと共にできる限り長く楽しむつもりです。

次は読書です。現在の私の読書は主に歴史小説です。実は人物名や年代を憶えるのが不得意だったため、中高生時代から歴史は私の苦手教科でした。特に日本史における「明治維新」は、私にはまるでブラックボックスでした。以前から、吉田松陰、坂本竜馬、勝海舟、西郷隆盛他、明治維新に関わった人物の動きと相互の関わり、新政府誕生の状況とその後を理解したいと思っていました。歴史が苦手の私でも、興味を持って読める本は司馬遼太郎の小説でした。「竜馬がゆく」「翔ぶが如く」「最後の将軍-徳川慶喜」「坂の上の雲」と読むことができました。

たまたま、今年の大河ドラマが「西郷どん！」であり、林真理子の原作は読み終え、テレビは欠かさず観ています。現在は海音寺潮五郎の

「史伝 西郷隆盛」と「西郷と大久保」を並行して読んでいます。このような読書等を通して、明治維新とは何かを自分なりにかなり把握できつつあると思っています。しかし、何分にも“小説”中心の偏った知識による理解です。この文を読まれた方の中で、「明治維新を知るにはこの本がお勧めだ」というものが有りましたら教えて頂ければ嬉しいです。

自宅の裏に結構広い畑があるので、時々畑仕事もします。農地に囲まれた環境に暮らしていますので、同年の友人たちの多くは、「畑仕事は面白い。野菜ができるのは楽しみ。」と言いますが、私自身は未だに楽しいと感じたことはありません。特に梅雨から夏の暑い時期は雑草が異常に早く伸びます。収穫したばかりの新鮮な野菜はおいしいですが、暑いなかで毎日水をやり、雑草を取るのは大変です。「こんな苦勞して野菜作りするなら買ったほうが良い。」とってしまうのは、畑の無い方からすれば贅沢なことでしょうか。

退職後の初年度には地元の町内会長の役を受け、1年間会報の配達他結構忙しく過ごしました。今年度は再度町内会長兼副区長の役目を受けざるを得ない状況となりました。2年間ほとんど毎日区の事務所に詰めていることとなります。予想以上に種々雑多な役目があり責任もありますのでストレスを感じますが、引き受けた以上は頑張るしかないと思っています。

ここまで読まれた方は、私が病気ひとつない健康な生活を送っていると思われるかもしれませんが、実は年齢相応あるいはそれ以上の問題を抱えています。3ヶ月ごとに精密検査を受けなければならない2種類の心配事があるうえに、健康診断を受ける度に新たな精密検査項目が加わりますので、通院と検査の時間確保に苦勞しています。体調万全とはいきませんが、これからも忙しく毎日を送ることになりそうです。皆様方も健康に留意され、楽しく充実した生活をお送りください。

お遍路のすすめ

間宮 美和

月日の経つのは早いもので、44年間にわたる学園生活を終えて、すでに10年が経過しようとしています。退職後私は、老後のスローライフを目指し主に旅行を楽しんでいます。旅行は健康増進と認知症予防に効果があるといわれ、自分のペースで立案し、自分の足で歩けることが何よりのメリットでしょう。ちなみに私は毎年年間60回以上国内外の旅行に参加しています。最近の海外旅行先は、ロシアやインドなどです。国内旅行で近年強い関心を持って参加しているのは、四国88ヶ所お遍路の旅です。定年退職後しばらく経つと次の日から何をしようか判らなくなり身の置き場に困る時があると思われませんが、そんな時には先ず手始めにお遍路旅に出掛けたらいかがでしょう。お遍路を始めるといっても何から始めたらよいか不安でしょう。そこで次に基本的なお遍路の方法などを紹介しておきます。

※ ※ ※

四国遍路は、空海ゆかりの寺院(88ヶ寺プラス高野山)巡礼の旅です。

1. 参加方法は、(1)公共交通機関を利用する〈歩き遍路〉で、約50日必要、(2)旅行会社企画の〈ツアーバス遍路〉で、食事や宿舎の予約は旅行会社が手配、先達が同行、約20日35万円必要、(3)マイプラン・マイペース重視の〈マイカー遍路〉。

以上3通りの方法があります

が、始めての人には〈ツアーバス遍路〉をおすすめします。



2. 服装は、全く自由ですが、やはり私の経験から、^{はくえ}白衣(道中着)と輪袈裟^{わげさ}はあった方がよいと思われます。
3. 納経用品は、線香、ローソク、^{おさめふだ}納札は必須。その他必要に応じて、納経帳(朱印帳)、御詠歌白衣、朱印軸、仏前勤行次第(経本)、念珠、心経杖(金剛杖)、遍路笠、ライターなど。
 ※これからの納経用品は、四国徳島県にある一番札所^{りょうぜんじ}霊山寺本堂の隣の売店ですべて購入が可能です。
4. お参りの順序と作法は、①山門で一礼、②手水舎で手を洗い清め、③本堂で灯明(ローソク1本)、線香(過去、現在、未来のため3本)を上げ、^{おさめふだ}納札(氏名、参拝年月日など明記)、おさい銭を納め般若心経などを読経、④同じ寺の本堂近くにある大師堂で本堂と同じように灯明など上げて読経、⑤納経所でご朱印を受け、⑥山門から一礼をして退出、これで1か寺参拝終了です。
 ※1か寺でローソク2本、線香6本、納札2枚が必要です。納札はお接待を受けた時も1本渡します。



以上何かのご参考になれば幸いです。

蕪村「春月辞」について

関 総一郎

岩波文庫は、いまはあまり人気がないけれど、平凡社の東洋文庫と並んで、私は、好きだ。珍しい古典を、最新の研究を踏まえた見事な注・解説で出してくれる。

最近も現代ラテンアメリカ文学の重要作家メキシコのフアン・ルルフォの短編集『燃える平原』(1953)や、エジプト・アレキサンドリア生まれの 20 世紀最高のイタリア詩人ウンガレッティ(1888-1970)の『ウンガレッティ全詩集』、お隣中国の漢詩文の規範ともいべき『文選一詩篇』などを、住んでいる一宮の市立中央図書館の新刊コーナーで見つけ、読んで気に入り、岐阜・名古屋まで買いに行った。一宮駅構内にある三省堂書店は、売れない岩波文庫の新刊は置かないからだ。

与謝蕪村(1716-83)の『蕪村文集』も、『蕪村書簡集』と同じく市立図書館の新刊コーナーで知った。今年の 1 月か 2 月ころだとおもう。そして今もベットの棚にある。現代文や翻訳文の文体に飽きると、口直しに『蕪村文集』を開く。

ここには有名な、藪入りで大阪から故郷・淀の馬堤(蕪村の生誕地)に帰る艶やかな女性に仮託した詩と句を並べた軽快な「春風馬提曲」も入っているけれど、私の好きなのは、蕪村自身の画と賛のある「春月辞」の一幅。

蕪村の俳画は他のいくつかの画集で見ても、その飄々とした諧謔がどれも楽しいが、この画では、画面の右から中央に、烏帽子の朗らかな貴人と、のんびりとしたその従者が進み、左下から、杖を持つ僧侶姿の人物がすれ違う。僧侶は少し腰をかがめている。ちょっと長いですが、画の上部の賛(のびのびとした書)を全文引いてみる。

もろこし・我朝にも、秋の月を賞する名どころはあまた侍るに、などて春月は等閑に見過ごし侍りにけむ。禁城の南門の辺りよりあふぎ見れば、如意が嶽のすこし南なる山のいたゞきより、きさらぎ十日あまりの月、ほのかにさし出、柳おぼろに、梅のおぼつかなくかほり来るなど、すべてやるかたなきこゝ地せらるゝに、何がしの大臣にやおはすらめ、内よりまかで給ふが、前もはらはでやをら行過給ふなど、ことにやんごとなき。

女俱して 内裏拝ん 朧月 夜半翁

全体が王朝風の和文で、奇をてらわず読みやすいが、私が感心するのは、秋月・春月のことではなく(第一、画には月は見えない)「前もはらわで」従者が先導して通行人を制止しないで、おとど(大臣)と僧がおもむろに行き交う、その平等性、やんごとなき庶民性である。軍事独裁の將軍家支配の、堅苦しい上級武士なら、こうはいかないだろう。だからこそ締め句で、やんごとなき平等性・庶民性に敬意をはらって「内裏(だいら)拝(おがま)ん」となるのである。幕末以後の近代天皇制とは異なる、温かい文化装置の京都がここにある。

もう一つは、締め句の「女(おんな)俱(ぐ)して」という表現の突然の出現である。ずいぶんと色気のある行為で、それまで画中にも文中にも、女は現れない。意表をつかれるが、快い驚きだ。炯眼な読者なら、文中の「柳おぼろに」「梅のおぼつかなくかほり来る」などから、女性的イメージを予感したかもしれないが、私は、ただただビックリした。

また、「俱す」というような、武家風もしくは漢文調の表現にも驚いた。もちろん文中に「我朝(わがちょう)＝日本」「禁城(きんじょう)＝内裏」といった漢文調の言葉使いはあるが、蕪村としてはテーマである春月＝「朧月」の場面で、何かインパクトのある所作・表現が、どうしても欲しかったということだろう。

おぼろ月夜のもと、坊主(蕪村は、いつごろか僧形ですごした・夜半翁は、別号)が、きれいな女を伴って、まるで武家か、歌舞伎役者のように見栄をはり、内裏を拝む、というアイデアがどうして出てきたか、分からないが、源氏以

来の王朝の色好み、あるいは坊主の色好みと、あるいは関係があるかもしれない。井上章一さんの『京都ざらい』によれば、京都の色街は、坊主のおかげだという。いわば上得意。過日、青い目の外人のお坊さんが、夕刻、とある高級酒房に入り、歓談・飲食するのをテレビで見たことがあるけれど、一休宗純が盲女を愛したごとく、良寛が、誰だっけ、を愛したごとく、坊主には、酒と佳人がよく似合う。蕪村もまたこの色好みを共有していたかもしれない。

貴人と従者、僧侶の朗らかな画。春月の素晴らしさと、貴人のやんごとなき平等性・庶民性をとく文章。そして坊主の色好みを、歌舞伎仕立てに歌い上げた締めめの句。ここにはいわゆる文人画とは異なる、詩書画の三位一体が感じられる。

ところでリタイアして(つまり、坊主と同じ身になって)7年、私は最近、足痛のため、酒をやめた。少なくとも家では飲まない。一方、佳人のほうはどうか。

いつだったか、近くのスーパーで、レジが混雑していて、隣の列に移った。すると前の女性が振り返って、

—よければ、お先にどうぞ、という。

化粧気のない、凜とした、あまりの美しさに、この年金生活者、つまり私は思わず

—いえ、時間だけはじゅうぶんございます、と答えた。

会計を済ませる女性の手は、家事に洗われ節くれだっていたが、私には光輝いて見えた。しかし残念ながら、その後、その佳人に再会したことはない。

2018. 7.12

「2018年度 ASUたちばな会 総会」

日 時：平成30年10月6日（土）11時～12時

場 所：愛知産業大学三河中学校 3階302教室

岡崎市岡町原山 12-10

TEL 0564-48-4881

内 容：

1. 開式のことば

2. 開場校の校長、教頭あいさつ

三河高校 校長 近藤 彰 先生

三河中学校 教頭 近藤 政弘 先生

3. 会長あいさつ

4. 新入会員の紹介

5. 平成29年度活動報告

第1回理事会 4月11日 法人事務局7階

学園110周年記念事業に参加 5月25日

総会・第2回理事会 10月14日

工業高等学校橘校舎3階 15名参加

ASUたちばな会報 2号 発行

新年会 2月3日 神宮前駅「弁天」9名参加

6. 平成29年度会計報告

7. 平成30年度活動計画

第1回理事会 6月2日 法人事務局7階

総会・第2回理事会 10月6日 三河中学校

ASUたちばな会報 3号 発行予定

三河高校の甲子園出場に1万円寄付

8. その他

9. 閉会のことば

以 上

事務局より

今回、会報 3 号を発送することになりました。これは、皆様のご協力の賜物だと思っています。ありがとうございます。

三河高校が第 100 回全国高校野球大会にし東愛知代表として出場できたことをお祝いしたいと思います。ささやかながら ASU たちばな会として支援させていただきました。ご協力ありがとうございました。

高校では、野球部の他にバスケットボール・自転車競技・空手(工業)、柔道・アーチェリー・ソフトテニス(三河)と愛知県の代表として頑張っています。

また、昨年度は 5 月 25 日には学園 110 周年記念事業完成式典に、本会より参加することが出来ました。

今後も周年記念事業、学校祭等に継続的に参加しようと思っています。イベント情報を学園ホームページの「学園退職教職員の会」に掲載しますので、ご確認のうえ参加していただければと思います。

連絡先：学校法人愛知産業大学

法人事務局総務部業務課 成瀬

eメール：naruse@asu.ac.jp

住所：〒460-0016

名古屋市中区橘 2-6-15

T E L 052-339-2781

F A X 052-339-2782